



慶應義塾大学ビジネス・スクール

キャッシュフロー概念と価値創造経営

A) キャッシュフロー概念

キャッシュフローという概念は、もともと、会計上の発生主義に基づく利益金額と、
手元現金との不一致を修正するという必要から発生したと考えられる。つまり、「勘定合っ
て銭足らず」という状態を如何に回避するか、そのための収益概念を発案しようとしたも
のと考えられる。換言すれば、発生主義に基づく利益概念を現金主義のそれに変換するた
めの工夫であった。これが、現金の流れとしてのキャッシュフロー概念である。昨今、会
計制度の国際化の中で、キャッシュフロー経営の名の下で意味されるキャッシュフロー概
念は、この現金流としてのキャッシュフロー概念である。キャッシュフロー概念の発生が、
上記の必要から出たものの、その後のキャッシュフロー概念の発展を眺める時、実は、も
う一つのキャッシュフロー概念が存在することを、是非とも指摘しておかねばならない。
財務管理の本質的な機能は、「ものやサービスの価値を評価する」ことであると、理解し
ている。その観点に立った際、収益力の捕捉概念としてのキャッシュフローが考えられる。
現に、EAT（税引後利益）は勿論のこと、EBIT、EBIAT、EBIDAT、EBITDA等々の
様々なキャッシュフロー概念が考案されてきた事実を、価値評価のためのキャッシュフ
ロー概念の発展として捉えなければならない。とは言え、将来における収益（稼得能）力は、
いずれにしろ、何時かは現金流として実現しなければならないことも事実である。しかし
ながら、近時における国際化に対応した、主として会計制度変革に伴うキャッシュフ
ロー概念の固定化傾向には、価値評価の視点が全く考慮されていないと言える。例えば、キ
ャッシュフローの重要性を強調しているにも拘わらず、相変わらず、単年度主義に縛られて
いるのは、現状における会計制度の一つの限界ではないだろうか。また、営業キャッシュ
フロー収支を算出する際、実際上の現金の受け払い情報から算出する直接法が望ましいと
いう条件が付けられていることは、価値評価の視点よりも、資金の流れ情報を重視するこ
との現われと見ることができよう。以上を要約すれば、現行のキャッシュフローには、大
別して2種類のキャッシュフローがあって、一つは、現金流としてのキャッシュフロー、
他の一つは、価値評価のための収益力を捕捉するためのキャッシュフローであるというこ